

学会だより

会員数の近年における推移

本会の会員数は、2219名（昭和60（1985）年3月末）である。そのうち通常会員は1634名、特別会員は549名、賛助会員は36名である。先ず通常会員、次に特別会員の会員数についてその内訳を眺めて、本会の1側面を認識する資料としたい。

通常会員は、本会の会員数の7割を超える。かつて、昭和40（1965）年ころには8割を超えて、特別会員の会員数の6倍強だったが、ここ10年くらいはほぼ3倍である（図1）。会員歴の長さの積算数を見ると、12年で50%、いいかえると、800名くらいの通常会員は、12年以上の会員歴がある（図2）。年齢構成を見ると、20%は30歳未満、他の20%は52歳以上、会員数の50%

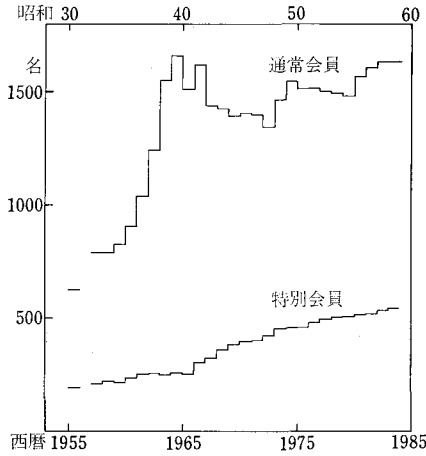


図1 年度別会員数

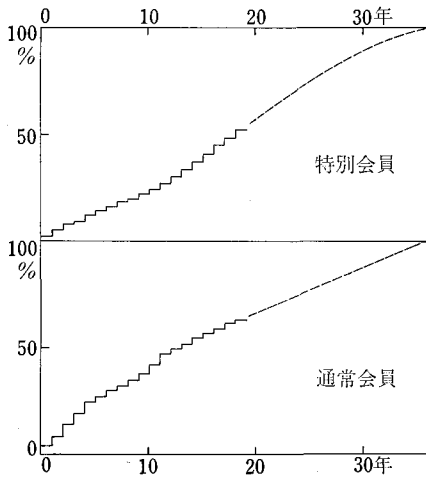


図2 会員歴年数積算分布

は30歳未満。広い年齢分布があり、25~40歳の他に50~60歳にもう1つのピークがあるように見える（図3）。地域別の会員数分布を見ると、東京54%、名古屋14%、京都12%等となっている（表1）。

図1を見て気になるのは、通常会員の会員数が、昭和40（1965）年以後、ほぼ一定値を保っていることである。しかも、1660名（1965）から1348名（1973）の間で不規則にかなり変動している。毎年の入会員数を見ると、多い年には158名（1981）もの入会者がある。つまり、過去20年間にわたって、入会員数と退会員数が、ほぼ同数あったのである。新入会員の年齢構成を見ると、25~30歳が3分の1を占めて最も多いが、広く各年齢層にわたっている（図4）。

特別会員は、1974年に500名を超えて、着実に増加している。過去20年間に倍増である（図1）。会員歴年数の中央値は、18年（図2）。年齢構成は、20%は34歳未満、他の20%は58歳以上。会員数の50%は43

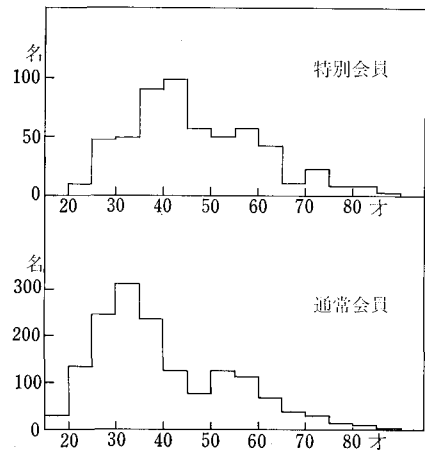


図3 会員年齢構成分布

表1 支部別会員数

支部名	特別会員	通常会員	賛助会員	計
	名	名	名	名
北海道	17	58	0	75
水 沢	24	49	0	73
仙 台	34	58	1	93
東 京	239	881	33	1,153
名古屋	78	233	5	316
京 都	116	197	1	314
中四国	18	70	1	89
九 州	16	75	0	91
外 国	27	13	0	40
合 計	569	1,634	41	2,244

(1986. 02. 04)

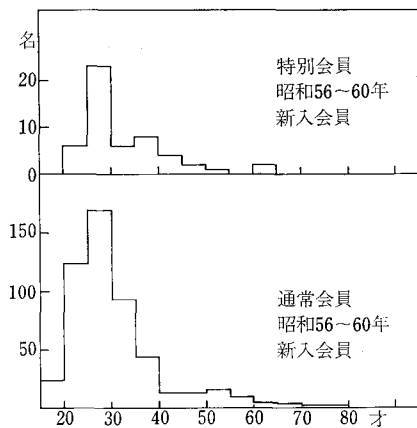


図4 新入会員年齢構成

雑報

学術会議の近況

田中春夫さんが亡くなる2ヶ月ほど前、装いを新たにした学術会議に対する抱負を拝聴する機会があった。田中さんが強調されたのは、(1)推薦母体である天文学会との連絡をよくするため、天文月報は学術会議に関する情報に大きな紙面を提供すべきである、(2)学術会議は小委員会の設置を認めて研連活動を充実すべきである、の2点であった。この御遺志が実現したことを謹んで御霊前に報告する次第である。

田中さんの後任として、4月23～25日に開かれた第100回総会に初めて出席した。総会は運営の細則に関する内規の修正が主要議題で、脳死をめぐる諸問題が主な討議課題であった。併せて開かれた第4部会では、若手研究者の養成が討議の中心であった。ここでは田中さんが尽力された小委員会がどのような形で認められたかを紹介する。

学術会議には多数の研究連絡委員会が設置されているが、各研連の全体会議だけが認知され、小分けの会合には旅費が出ないだけでなく、認知もされていなかった。それが今回の修正によって次の形で認知されることになった。

専門委員会。 細分した領域についての研究連絡、または国際的的事业等に対応するために設置される。天文学研連には日食専門委員会が、地球電磁気学研連にはSTP専門委員会が設置される。研連の委員以外の人も招集できるが、その人には旅費が出ない。

小委員会。 研連委員以外の人が含まれる会議は小委員と称し、期限を付して設置される。

専門委や小委の設置は、研連から世話担当部長に申し

歳未満である。全体に25～65歳の40年にわたる平坦な台形分布の上に35～45歳のピークがのっているように見える(図3)。地域別の会員数分布は、東京42%、京都20%、名古屋14%、仙台6%について外国5%となっているのはおもしろい。新入会員は、25～30歳が多いが、30歳以上の各年齢層にも半数近くが分布している。

資料作製にご協力いただいた日本天文学会事務局に感謝します。

(西野洋平, 石田憲一)

☆ ☆ ☆

出て、第1常置委員会と運営審議会の議を経て認められる。

研連委員の任期。 通算3任期(9年)を限度とする。ただし、会員及び国際学術団体役員等特別な事由で委員となっている期間を除く。ただし、第12期以前(昨年夏まで)の在任期間は算入しない。この制限があるため、委員の選び方を工夫しなければならないであろう。

(名大理・早川幸男)

NGC 5253 に出現した超新星 1986 F のその後

その後の国際天文連合回報によると、この超新星は母銀河の中のH II領域の輝度が最高の場所を新星ではないか?と見誤ったのではないかと考えられている。McNaughtによるこの超新星と思われるH II領域の精測位置は、

$$\alpha = 13^{\text{h}}37^{\text{m}}05^{\text{s}}.07 \quad \delta = -31^{\circ}23'14''.0 \quad (1950.0)$$

であり、母銀河の中心から東へ3秒、北へ6秒であるという。そして、Campbell-TerlevichのH II領域のBとCの中間点になるという。

Filippenko たちによると1984年7月24日にセロトロロの4m鏡で得たCCD像と1986年5月10日にリック天文台の3m鏡で得られたものについて、その両者に有意な差は検出できなかったという。

どうやら、この1986Fと名付けられた超新星は、コンパクトH II領域を見誤ったのではないかと考えられている。NGC 5253には、前にも述べたように過去において2個の超新星の出現が記録されている。そして、その見かけの光度は8.0等と8.4等級で、絶対光度も-19.8等と-19.4等と求められている。今回の現象は、Evansが発見した時に13等級であったと伝えられていて、極大前か極大後か、いずれにしても前の2個と比較して考えられていたのである。(香西洋樹)